

公共の広場で取り分けよく語られた物語に「ハマハメの馬鹿」という話がある。

みんなは彼のことを「ちび星」と呼んでいたが、それは彼の顔に痣があったからだ。かつて彼は石を投げつけられて、それが星の形の痕を残したのでみんなが「ちび星」と呼んだということなんだ。ちび星はあちこちぶらつくのが好きだった。

ある日彼は首都のモロニへの旅に出た。途中で彼はバハニ村を通り、喉が渴いていたので住人に水を少しくれるよう頼んだところ、一人の住人が答えた：

「お前は本当に気まぐれな奴だな。私はお前が毎日そこを通ってはモロニの方に戻るのが見ている。モロニで何をしようというのだい」。

ちび星は答えた：

「友達に会うんだよ。」。

彼が話しているその友達というのはモロニでも飛びきりの金持ち階級で、モロニの住民たちがそのけちんぼさに辟易しているという評判にもかかわらず、この馬鹿者と親しくなり友達になった。彼はサイド・ムウィニ・アキリという名前で商売をしており、店を一軒持っていた。

ちび星がまだバハニにいるので、村人が彼に尋ねた：

「そこで誰に会うんだい」。

彼は答えた：

「そこに行ったら友達のサイドに会うんだよ」。

ちょっと抜けているちび星は、友達についてはサイドという名前しか知らず、サイド・ムウィニ・アキリというフルネームは知らなかった。サイドというのはグランド・コモロではありきたりの名前で、その大多数がモロニにいて、みんな商売をしていた。

そこで村人は皮肉な調子で嘲って言った：

「お前はなんて馬鹿なんだ！ モロニにいるサイド全員の中で、お前の友達になろうなんて人間がいると思っているのかい。その友情は彼になんの得があるんだ」。

ちび星は答えた：

「彼を訪ねに行く気にさせたものが何かはわかっているし、友達の方でもこの友情で得になることを見つけるよ」。

他の村人が尋ねた：

「その友情で彼が見つかるものって一体何だ？ 哀れな馬鹿者よ」。

ちび星は断言した：

「この友達はとても金持ちで、僕は彼と商売をやるんだ。商売をしようとする者は、ハマハメの馬鹿の友達であるサイドのところに行くんだからね。それで彼は他の人たちと違って儲かっているんだ。僕も彼のところで、良い事と悪いこと、つまり、しなければいけない事としてはいけない事を見分けることを学んだ。そこで二人とも利益がある訳さ。あんたは僕が馬鹿だと言うけど、今じゃ物を知っているんだよ」。

こう行って彼はモロニに向かって再び出発した。

サイドはサグというハマハメ村の名物料理を友人に振る舞うのが習慣だった。[ちび星が] 到着すると料理が準備され、サイドはそれを分け合うために友達全部を招待した。しかしながら彼の取り巻きの一人に、サグを食べない人がいた。彼はサイドの家に着いた時に料理の強烈な匂いを嗅いで、罵り始めた：

「ああ、サグを食べに招待されたとは。そんなものはハマハメに送り返した方がいい。ところで、我々はそんなもの食べないのだろう？」。

馬鹿者は黙って、その小言には答えなかった。食事の最中に他の人が彼に頼んだ：

「サグを食べるのにスプーンを持ってきてくれないか」。

馬鹿者は突然立ち上がって泣き始めた：

「なんて情けないことだ！　なんて惨めなんだろう。今度こそ本当に侮辱された。ハマハメのサグはスプーンじゃなくて手で食べるんだ。回り中から始終侮辱の言葉が耳に入ってくる。僕はハマハメの馬鹿と呼ばれるけれど、自分としては気にしたことは決してない。でも今日はあんたたちは本当に僕を侮辱したんだ」。

どうして彼はそんな風に応じたのかって？　ハマハメのしきたりでは、サグは手で食べるもので食器を使うものではない。スプーンを頼んだ男は、ハマハメの従姉妹の一人と結婚していたことは確かなので、多分そのしきたりを知らないはずがないのだ。こういうわけでちび星は侮辱されたと感じたのである。